



Title	<図書紹介> 『フンボルトの言語研究—有機体としての言語』
Author(s)	齊藤, 渉
Citation	大阪大学言語文化学. 2001, 10, p. 309-311
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/78012">https://hdl.handle.net/11094/78012</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 図書紹介

ここでは、言語文化学会会員が出版に関して大きく関わった図書について、本人が紹介いたします。

---

齊藤 渉著 『フンボルトの言語研究 — 有機体としての言語』、京都大学学術出版会、2001年3月25日、305頁、3800円。ISBN 4-87698-412-3

---

「言語は有機体である」——もし現代の言語学者が学会で大真面目にこう主張したら、どのような反応が起こるだろう？ 批判されるならまだましで、一笑に付されるか、黙殺されるのが関の山ではないだろうか。案外、一部に熱心な支持者が現れたりするのかもしれないが、それでも、学会内でこの言語学者を待ち受ける将来がさほど明るいものにならないであろうことはおよそ想像がつく。

本書がテーマとする、ヴィルヘルム・フォン・フンボルト（1767—1835）の言語研究に繰り返し現れるのが、この「有機体としての言語」という考え方である。恐らく、こうした発想に戸惑う人は少なくないだろう。私自身の経験からすれば、それを怪しげな考え方だと思う人がいてもまったく不思議はない。

言語を有機体に喩える議論は、近代言語学の成立した19世紀初頭に広く見られるものであり、言語学史や思想史の研究でも、有機体概念が当時の言語理論において果たした役割のことはよく知られている。そのなかで代表格ともいべき存在がほかならぬフンボルトであった。では、そもそも当時、言語＝有機体論はどのような意味をもっていたのか？ そして、フンボルトの独自性は——もしあるとすれば——どこにあったのだろうか？

本書の序論にあたる第1章では、カントの批判哲学とドイツ観念論の時代に生まれたフンボルトの言語研究が、言語を精神の制作物と見なすパラダイムのなかにありながら、このパラダイムに生じたある変動をも示している、という基本的観点を提示する。

次に、フンボルト言語論の基本構造をあつかう第2章では、最晩年の『カヴィ語研究序説』を中心に、彼の言語研究に繰り返し現われるいくつかの主要概念を分析する。とりわけ、内的／外的、形式／質料という対立、西洋の形而上学に抜きがたく染みついた対立が、彼の思考を深く規定していることが示される。例えば、「内的言語形式」という有名な概念も、この二つの軸の交差する点からとらえることによって、その意味がよりよく理解されるだろう。かくして、フンボルトの言語研究は、経験的・歴史的研究と

いう基本的性格にもかわらず、経験に直接与えられる（＝外的・質料的な）ものを超えた（＝内的・形式的な）次元にかかわっている。このような次元に結びつけて、有機体概念の機能をいわばテキスト内在的に示すのがこの章の主眼である。

続いて、第3章では、言語＝有機体論の歴史的背景を考察する。ここではある一つの問い——言語は誰が作ったのかという問い——を手がかりに18世紀中葉以降の言語思想史をたどりなおす。

まず、フンボルトの態度がどのような歴史的背景をもつのかを理解するため、18世紀後半の言語起源論争を振り返ってみる。ヘルダーの『言語起源論』とハーマンがそれに対して行なった批判は、言語の制作主体としての起源が、もはや自然内の主体（人間および動物の魂）にも超自然的な主体（神）にも求められなくなるという帰結をもたらした。

この問題状況は、『判断力批判』においてカントが直面していた問題と平行している。同書の第二部「目的論的判断力の批判」が扱うのは、自らの起源を神にも人間にももたないような自然物、すなわち有機的生命の問題であったからである。生命の発生をめぐる同時代の議論を踏まえつつ、カントの与えた解答は、有機体が自己自身を作るかのように見えず、というものであった。彼の言う「自然目的」もまた、経験に直接与えられたものを超えた次元にかかわるものである。

フンボルトの言語＝有機体論は、言語起源論争と有機体論という二つの問題系列を受け継ぐものであり、言語が言語自身を作るかのように見えず、という態度の表明であった。これは、「言語は誰が作ったのか」という問いに対し、「言語は誰かが作ったのではない」という前提のもとで残された選択肢にほかならない。経験的・歴史的言語研究が経験を超えた次元と関係づけられるという第2章の考察は、このような歴史的背景と合わせて見る時、別の意味を帯びることになるだろう。はたして、フンボルトの出した解答は、唯一可能な選択だったろうか？

最後の第4章では、これまでの考察から引き出される問題をもとに、独立の理論的考察を行なう。「あらゆる理解はつねに同時に非理解である」というフンボルトの発言に注目しながら、彼の言語研究に見られる「直接的所与とそれを超えるもの」という主題を現象学における地平の概念と関係づけ、言語＝有機体論の前提と帰結を批判的に分析するのがこの章の課題である。フンボルトが言語＝有機体論に行き着いた背後には、言語の差異とならんで言語の変遷の問題があったが、彼においては差異の問題が変遷の問題に対し基本的に優位にある。つまり、変遷はあくまで例外的で、差異こそが本質的なものと見なされている。だが、彼の言語論にはこのようないわば「公式見解」に回収し切れない認識が見られる。言語を精神の制作物と見えずパラダイムに少なからぬ緊張関

係をもたらしているのは、まさにフンボルトのそのような認識なのである。

なお本書は、私が日本学術振興会特別研究員（DC1 および PD）として交付された科学研究費補助金による研究成果の一部であり、刊行に際しては、平成 12 年度科学研究費補助金（研究成果公開促進費 課題番号：125023）の交付を受けた。